

介護相談員の声

「介護を終えて」

まず、私が介護相談員になった経緯をお話します。介護保険制度が始まる前は、義母が痴呆症になり、妄想・幻覚症状が重く、昼夜のない介護をしておりました。そんな頃、介護者同士が集まる「介護者家族の会」に参加し、心が癒やされ、大変な介護の話も聞いてあげることができました。憎まれ口を言っていた義母も「ありがとう」と言ってくれて、8年間程の介護を終えました。そして、平成 12 年、介護保険制度が始まると、介護経験者として勧められ、福祉団体の研修を受講。介護経験が役立つならと、介護相談員になりました。

ある特別養護老人ホームを訪れた時のことです。脳梗塞の後遺症で身体が不自由で、車いすに乗って一人暮らしのため在宅生活ができないHさんという方がいらっしゃいました。認知症で身寄りがなく、仕方なく入所されていたのです。

「Hさん、何かお困りのことはないですか。ご不自由なことは？」とたずねても「上げ膳据え膳で贅沢な。罰が当たるわ」と遠慮されます。

「どうしてここにいらっしゃるの？」とお声を掛ければ、「息子夫婦と暮らしてたん。息子が癌で死んだので、嫁さんは優しいしええ人やけど、働かならんやろ。私も転んで骨折してから、何も家のことも自分のこともちゃんとできひんし、世話になるの悪い。あんたも話し聞いてくれてありがとう。また来てや」と話していただきました。

少しの認知症があっても顔を覚えていてくれる方もおられます。

何回か回を重ねて行くと、「来てくれたん。あんな、あんただけに言うけど、誰にも喋らんといてや。あの人とわかれると困るし」と気を許して、話しかけてくださる。

「あの人な、テレビ見る場所がいつも同じで、ソファに陣取って座ったはるの。うっかりそこへ座ってて、そこへあの人が来はったら怖い顔しはるの」と日常のことを話してください。そんな時は、「おられなかったんで座ってたの。ごめんね」と一言あやまっておけばと話すと、「そやね。普段思っていたことを聞いてもらって、ちょっと気持ちが軽くなった。おおきに」と言っていました。

施設側も、入所者のことは、誰がどのようにされてるかなど、よく見て把握はされています。自宅復帰を前提とした介護老人保健施設と違って、特別養護老人ホームは終の住処であって、入所者はみんな、大きな家の中で大家族の一員のように生活しています。

しかし、問題行動が起きることもあり、施設でのケアは大変な重労働で、職員さんもお苦勞なことだと感じます。

職員さんも、ゆとりがあればソフトなケアができると思います。

認知症の人にも寝たきりの人にも、人間として尊重しながら接したいものです。

京都市介護相談員 塚田 幸子